



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	技能実習生の日本における生活の実態とその特徴：コミュニティの形成状況からの考察〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	白崎, 弘泰
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(国際広報メディア)
Dissertation Number	甲第15106号
Issue Date	2022-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/86493
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Hiroyasu_Shirasaki_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア）

氏名：白 崎 弘 泰

学位論文題名

技能実習生の日本における生活の実態とその特徴

ーコミュニティの形成状況からの考察ー

本稿は、外国人を「労働力」として来日させる仕組の一つとなっている技能実習制度の実態を、北海道空知地方の農業地域でのフィールドワークを通じて明らかにしようとするものである。

外国人技能実習制度は、主として途上国を対象に、研修と実習を通して農業や製造業分野での技術移転をはかる、という目的で構想された。ところが、少子高齢化その他の要因による人手不足から、受入先は安価な労働力を切実に求め、研修生は家族のために、現金や家電などをなるべくたくさん持ち帰りたい、というそれぞれの思惑により、当初の理念は事実上反故にされ、外国人の単純労働者を入国させるための方便となっている。表向きは「労働者」ではないため、安すぎる報酬で長時間労働を課すなど、様々な問題が指摘されており、制度改革が進行中である。

本稿のフィールドであるA市は、1960年代までは炭鉱の街として栄えていたが、1990年代までに炭鉱が全て閉鎖されて以降、農業や観光業を中心とするよう転換していった。ところが、年を経るごとに農業の担い手が高齢化し、農家の維持が困難になっていたことから、実習生の受け入れ先として名乗りを上げたものである。

A市の実習生は全員が中国人女性である。搾取であると批判も多い実習生制度ではあるが、受け入れ先農家も、実習生も、ともに不満が少なく、成功している事例である。もちろん、受け入れを

担当する受託業者や自治体、受け入れ先農家が、良心的に振る舞ったことが大きい。それ以外にもA市独自の事情として、携帯電話（スマホ）を当初から比較的自由に使わせていたことがあげられる。実習生は、中国の親族・友人とのチャットに使用することが多く、受け入れ先農家以外の日本人とはほとんど接触がない実習生にとって、動機付けの維持に不可欠な機器だと言える。また、他の農家にいる実習生との横の繋がりも観察された。待遇や労働内容などについて他の地域と比較されると、トラブルの火種になりかねないので、初期は、宿舎での携帯電話の使用禁止や、端末を取り上げる地域もあったという。A市は、中国人の本国や他の実習先との情報交換を妨げなかったことで、逆に信頼を勝ち得たと言ってよい。

実習生は、「稼ぐために来ている」という意識が強い。観光や自分のための買い物にはほとんど興味を示さず、職場と宿舎を往復する生活を淡々と送っているように見える。地元住民との交流は活発とは言えず、また、同郷の旅行者や留学生等と接触することもほぼない。宿舎でも、もっぱらスマホを通して家族や郷里の友人とのみ繋がっている。帰国後も連絡を取り続けることはほとんどない。これは同郷人を手がかりに海外に進出し、そこで確固としたコミュニティを作った、かつての華僑とは大きく異なる点である。実習生にとって、帰属意識を持ち得るコミュニティは遠く離れた郷里にあり、日本で積極的にコミュニティを構築していくことはない。

ただ、短期間とはいえ日本で生活の面倒を見てくれる農家の人たちには、家族のような愛着を持つケースもたびたび見られた。また、同宿舎の者との交流はさほど盛んとは言えないが、生活を共にしているので、話をする理由も話題もあることから、まったくの無視というわけではない。事前講習で一緒だった者は、宿舎の仲間以上につながりが深く、そこから異なる地域の実習生同士が横の繋がりを持つこともあった。

A市の事例は、高い帰属意識を持ち少しずつ中心に浸透していくような実践コミュニティを、農家や宿舎、講習といった擬似的なコミュニティに置き換えても成立しうることを示唆している。近年は「見聞を広めたい」といった、金銭目的よりも海外体験を希望する実習生も増えている。今後は、コロナでできなかった、帰国した元実習生の追跡調査などを通じて、金銭以外のモチベーションについても探り、研究を深化させたい。